

聖書：創世記 21：22～34

説教題：永遠の神、主の御名を呼び

日時：2023年10月15日（朝拝）

今日の箇所にはアビメレクとその軍の長ピコルが出て来ます。このアビメレクとは誰でしょうか。アビメレクは前の20章に出て来たゲラルの王です。その20章でアブラハムは以前と同じ罪を繰り返したことを私たちは見ました。アブラハムはその地に滞在していた時、人々を恐れて自分の妻サラを妹だと言いました。そのためゲラルの王はサラを召し入れましたが、神によって実は彼女はアブラハムの妻だと知らされ、彼女に触れるには至りませんでした。アブラハムはこのため、アビメレクに呼び出されて、「あなたは何ということを私たちにしたのか」と叱られました。しかしアビメレクはアブラハムを神の預言者として恐れたからか、彼にその地での寄留を許可しました。そのアビメレクが再び今日の箇所に出て来ます。今回は軍の長ピコルも連れてです。何のためだったのでしょうか。

アビメレクはアブラハムにこう言います。22節：「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられます。」アビメレクはアブラハムに注目していました。彼が神によって祝福されている様子を見て来ました。前回アビメレクが出て来た時と今回との間にあったのはイサク誕生の出来事です。百歳の夫婦から奇跡的に跡継ぎの子が生まれたことについてアビメレクは聞いていたかもしれません。またアブラハムの家から祝福があふれ出ている様子をアビメレクは見ていたのでしょうか。それは彼にとって脅威と感じられるほどだったと考えられます。そこで彼は軍の長を連れてアブラハムのところに来たのです。平和の契約を結ぼうとしてです。アビメレクは23節で言います。「それで今、ここで神によって私に誓ってください。私と私の子孫を裏切らないと。そして、私があなたに示した誠意にふさわしく、私にも、またあなたが寄留しているこの土地に対しても、誠意を示してください。」これはある意味でかつてのアブラハムの振る舞いを改めて非難するものでもあったと思います。アブラハムは前に偽りを述べました。この言葉で言えば裏切り、誠意を示しませんでした。そういう意味で彼は前科者です。そこでアビメレクは今後はそうしないと約束して！と誓約を求めました。彼はその際、「私があなたに示した誠意にふさわしく」と述べています。確かに20章で彼は道徳的な王として示されていました。彼は夢の中に現れた神に対して自分が潔白であることを主張しました。神もそのことを認めておられました。また彼はア

ブラハムが自分にひどいことをしたにもかかわらず、彼の領地内にアブラハムが住むことを許しました。そのようにあなたも誠意を示してくださいと彼は言います。私に対してだけでなく、私の子孫に対しても、またあなたが寄留しているこの土地に対しても、と。

これに対してアブラハムは「誓います」と答えました。まずここに目を留める価値のあることがあると思います。今やアブラハムの方がアビメレクより上位にありました。今やアビメレクの方が恐れてアブラハムと契約を結びたいと思っています。ある意味で以前と立場が逆転しています。ですからアブラハムはしようと思えば、ただで応じるのではなく、何か自分に有利になることを条件として提示することもできたはずですが。しかしアブラハムは単純に「私は誓います」と応答しました。なぜでしょうか。それは相手が信仰者であろうとなかろうと互いに平和に生きるよう努めることは神の御心にかなうことであり、信仰者にとってそれは義務だからです。お互いがそのためにより一層信頼し合って生きることができるよう契約を結び、誓約し合うことは良いことであり、進んでなすべきことであると彼は考えたからです。ローマ人への手紙 12 章 18 節：「自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。」

しかし彼はここで一つのことは問題にしました。それはアブラハムが掘った井戸をアビメレクのしもべたちが奪い取っていたことについてです。このネゲブの地方、南の地方は、より乾燥した地域であり、井戸はそこでの生活に欠かせませんでした。まさにライフラインでした。その貴重な井戸をアブラハムは横取りされていました。そのことに対処してほしいと抗議したのです。これは契約を結ぶことと引き換えに自分に有利な条件を提示したということではなく、アブラハムは契約を結ぶにあたって正義を求めたということです。両者の間に正しい状態、正しい関係があることを願ったのです。これに対してアビメレクは 26 節で「誰がそのようなことをしたのか、知らなかった。あなたもそれを私に告げなかったし、私は今日まで聞いたことがなかった」と答えました。これは本当にそうだったのか、それとも単なる言い逃れだったのか、色々な見方がありますが、真相は良く分かりません。またどちらであれ、それはここでは大きな問題とはならないでしょう。このことを踏まえてアブラハムとアビメレクは契約を結びます。その際、アブラハムが羊と牛を取ってアビメレクに与えました。これもどういう意味かを巡って理解の仕方が色々あります。ある人は契約を結ぶにあ

たり、より劣るパートナーの方が上位者に贈り物をすると考えます。劣る方は受益者となるわけです。そこで契約を結んでくれる相手に贈り物をする。しかしある人は、ここでアブラハムの方が上位者であるのではないかと問います。アビメレクの方が約束を取り付けたくてやって来た。だからこの贈り物は上位者の側から贈られる贈り物なのだとその人たちは見ます。これも注解者によって意見が分かれています。いずれであれ、このことをもって両者が互いに平和に生きるための契約が結ばれました。

そしてこれとは別にアブラハムは羊の群れから七匹の雌の子羊を分けておきました。アビメレクは、これは何のためのものですかと問います。これは先の井戸の所有権を確かなものとするためのものでした。アブラハムは 30 節で「私がこの井戸を掘ったという証拠になるように、七匹の雌の子羊を私の手から受け取ってください」と言います。これがこの土地の名、ベエル・シェバと関係しているようです。31 節に、この場所がそう呼ばれたのは「彼ら二人がそこで誓ったからである」とあります。この「誓う」という言葉は、24 節に先に出ていて、そこに印がついており、欄外の注 24 を見ると、ヘブル語の「シャバ」という言葉が語根であると記されています。そしてその誓いにおいてアブラハムは七匹の羊を差し出しました。30 節の「七匹」という言葉にも印がついていて、欄外の注 30 を見ると、ヘブル語で「シェバ」とあります。つまり彼らはこの場所で誓った（シャバ）が、その際、七匹の羊（シェバ）をもってそうしたのです。贈り物を受け取ることは相手の主張に合意したことを意味します。こうしてアビメレクはこの井戸を公にアブラハムのものとして認めたのです。その井戸はアブラハムのものとされ、この地はベエル・シェバという名で覚えられるようになったのです。こうしてアビメレクと軍の長ピコルは安心して帰って行きました。今後、互いに平和に暮らすことを約束し、信じ合って。

さて今日の記事がここまでならアブラハムがこの世の王とどんな取引をしたかという記録に過ぎなくなってしまうのですが、この後に 33~34 節が続いていることで、ここに一層霊的な深みが加わることになります。アビメレクとピコルが帰って行った後、アブラハムはどうしたのでしょうか。この世の王と契約を結んで安心したのでしょうか。ベエル・シェバの井戸が正式に自分のものとなって良かった！と喜んだだけなのでしょうか。33~34 節にはアビメレクたちが帰って行った後にアブラハムのしたことが記されています。彼がしたことはベエル・シェバに一本のタマリスクの木を植え、神の名を呼んだことです。つまり礼拝です。タマリスクという言葉には印がついてい

て、欄外に別訳として「ギョリュウ」とあります。新改訳第三版までここは「柳の木」と訳されていました。ネットで写真を検索してみると確かに柳に似ている木のようです。彼は直前の出来事を感謝し、いわば記念植樹をして神を礼拝しました。何を彼は感謝したのでしょうか。ここに彼が「永遠の神、主の御名を呼び求めた」とあります。

「永遠」という言葉が創世記で最後に出て来たのは 17 章でした。17 章 7 節で、主はアブラハムとアブラハムの子孫との間に永遠の契約を立てると言っておられました。また 17 章 8 節では、この寄留の地、カナンをあなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与えると言っておられました。思ってみるべきは、このベエル・シェバの井戸はアブラハムが約束の地で初めて自分のものとして持ったものであるということです。この地における彼の最初の所有です。つまりアブラハムはここに永遠の契約を立てて導いてくださっている神の約束の最初の成就を見たのです。まことにそれは後に与えられる祝福の全体からすればわずかで、ちっぽけなものかもしれませんが、ついに神は約束の成就として、ここに一つの井戸を、私の所有として与えてくださった。ここで生きるための命の象徴となる井戸を与えてくださった。そのことを思っ
てアブラハムは永遠の神、主の御名を呼び求めて礼拝したのです。そして永遠の神がこれから与えてくださる大きな祝福を信じ、そのことに思いを馳せたのです。ここにアブラハムがこの世の人と違うことが示されています。この世の王と取引して喜んで終わりではなく、神の約束に基づく御手を認めて神に感謝し、神を礼拝したのです。

そして最後の 34 節に「アブラハムは長い間、ペリシテ人の地に寄留した」とあります。ここに先の礼拝とともに信仰の民のもう一つの特徴的な姿を見ます。聖書の他の箇所でも言われていますが、クリスチャンのこの世における生活のイメージは「寄留者」というものです。外国生活ということです。クリスチャンはこの世に生きていますが、この世に属する者ではありません。ここが私たちの真の故郷ではありません。もしここが私たちの住むべき国なら、アブラハムのように百歳を超える年齢になっても、まだ寄留者状態であるのは残念であり、哀れな姿でしょう。しかしアブラハムはこの状態で良しとしました。寄留者で良しとしました。自分は永遠の国を目指している者であり、この世にあっては旅人であると受け止めていたからです。ヘブル人への手紙 11 章 13～16 節にはアブラハムら族長たちが憧れていたのは地上の故郷ではなく、もっと良い故郷、すなわち天の故郷であったと記されています。それをはるか遠くに見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。確かにアブラハムは今日の箇所でもベエル・シェバの井戸を自分のものとして喜びました。

しかしこれは神の永遠の約束が真に成就することを目に見える形で確証する一つのしるしに過ぎません。アブラハムたちは地上のことを通して天を瞑想して歩きました。その天の国こそ自分たちに約束されている最終的にたどり着くべき国なので、今ここでは旅人で良いとしたのです。イエス様もヨハネの福音書 18 章 36 節で「わたしの国は、この世のものではありません」とピラトに言われました。神の民は、この世にありつつ、この世に属する人ではありません。天の故郷を目指して、この世では巡礼者としての歩みをする人です。

以上の箇所から私たちはこの世で生活する者として人々と平和の内に歩むことを進んで求めるべきこと、しかしただこの世に属する人のようになってはならないことを教えられます。信仰者の異なる点は神を見上げ、神との関係ですべてを考えることです。永遠の神、主がご自身の約束に従って今ここで働いてくださっていることを覚えて、主に祈りと感謝をささげるのです。そして神が与えてくださる栄光の御国を目指して歩むのです。私たちも地上のことに終始するのではなく、神が召している天へと目を上げ、神を礼拝し、神が備えてくださっている道こそを歩く者たちとされたいと思います。

そしてもう一つ最後に付け加えたいことは、この世にあって寄留者である私たちが持つべき祈りは、天の御国を目指す私たちの歩みが周りの方々への証しとなることです。私たちはただ自分を世から区別し、天に向かう民であれば良いものではありません。神の民の使命として創世記 12 章 3 節で神はアブラハムに「地上のすべての部族はあなたによって祝福される」と言われました。まさにそのことが今日の箇所でも起こっていました。アビメレクはアブラハムを見て、「神はあなたとともにおられる」と言いました。アブラハムはその信仰の歩みによって周りにインパクトを与えていたこと、神がアブラハムをそのように用いていたことが示されていました。これは私たちにとっても当てはまることです。私たちもこの世に埋没すべきではないこと、むしろ天国の民としてのアイデンティティーをもっていつも主を礼拝し、御国を目指して歩むべき者たちです。しかしただ自分がそうあることを求めるだけではありません。その歩みを通して私たちの神が証しされること、人々の間にこの神とともに歩む祝福が広がって行くこと、そのことも私たちは祈り願って行くべきなのです。

今日の午後に行われるゴスペルコンサートもそのためのものです。私たちは今まこ

との神を礼拝しています。これは神の民の歩みに欠かせないことです。と同時に、その私たちを通して神の祝福が周りの方々にも広げられて行くこと、これも神が御心としておられることです。私たちはこの世の人々と良いことのため、平和のために、できる限りともに働き、協力すべきです。しかしそのあまり、この世の一部と化すのではなく、常に神礼拝へと立ち返り、神とともに歩むことにおいて独特な者たちであるべきです。しかしそのあまり世から身を引くではありません。神が与えてくださっている違いをもって世に証しするのです。神の民として歩む素晴らしさ、神とともに歩むことの素晴らしさを証しするのです。午後のコンサートもこのために用いられますように。「地のすべての部族は、あなたによって祝福される」という御心にさらに生きる者となることを御前に祈り求めて歩みたいと思います。